

アメリカにおけるエスニックコミュニティの形成

——三世によるサンフランシスコ日系コミュニティ再生運動——

安 藤 幸 一

The Development of an Ethnic Community in the U.S.

ANDO Koichi

1. はじめに

21世紀を迎えて、アメリカ合衆（州）国は、国家が持つ民族の共同体としての既成概念を、根本から変えてしまう壮大な実験をしているように見える。2000年の国勢調査によると、たとえば最大の移民人口を抱えるカリフォルニア州では、白人人口が全人口の50%を割り、すでに人種としての多数派は存在しない。都市部だけを見てもそのことはさらに明らかであり、非白人人口が白人人口を大幅に上回っており、マイノリティー（少数派）という言葉が自己矛盾をおこす状態が生まれてきている。出生地主義をとるこの国では、たとえ親が他の国から移民してきたにせよ、アメリカ生まれの子供は自動的にアメリカ市民となり、当然のことながら成人すれば選挙権、被選挙権を得ることができる。又、アメリカに入国する外国人の受け入れ機関であるImmigration & Naturalization Services（移民帰化サービス局）は、その名称でも明らかなように、移民がアメリカ国籍に帰化することを前提としており、アメリカ市民になる道は大きく開かれている。この「移民帰化局」、「移民」という名称を、日本の「出入国管理局」および「外国人労働者」と比較してみれば、その差異は一目瞭然である。日本では、日本民族の一員でない限り、たとえ帰化したとしても「日本人」として一般に認められることは難しい。在日韓国・朝鮮人という日本において100年近い歴史を持つ民族グループを、たとえばその歴史の長さにおいて類似する日系アメリカ人という名称と比較してみてもこれは明らかである。この移民によってつくられた国、アメリカでは自由と民主主義を標榜するその根本的な国家理念に賛成するものであれば、誰でも「アメリカ人」になることができる。したがってアメリカにおけるエスニックコミュニティは、まず自分がアメリカ人であることを前提に成立していることが特徴である。しかし、これはアジア系やヒスパニック系など非白人で

ありヨーロッパ系よりもずっとおくれてこの地に渡ってきたマイノリティーグループにとっては、けっしてその歴史の初めから真実であったわけではない。たとえば本論の主題である日系アメリカ人の場合、一世は帰化不能外国人という烙印を押されアメリカ人になる法的条件そのものがなかった世代である。アメリカ生まれの二世は、アメリカ市民でありながら、日米が開戦すると強制収容所に入れられアメリカ人であることを、軍隊に志願し自らの血をもって証明しなければならない世代であった。日系アメリカ人というアイデンティティーをもち、アメリカはすべての移民に開かれた国であることを体現しようとした世代は、60年代後半からの三世の登場を待たなければならなかった。つまり、この万人に開かれたと言われる国の内実は、その歴史の中で幾世代にも渡るマイノリティーグループの闘いの中で勝ち取られてきたものであるという認識は、きちんと確認しておく必要があることだろうと思う。

よくいわれる「メルティングポット」から「サラダボウル」への変化は、60年代の公民権運動にその端を発していると言える。初期移民であるイギリスやその他の西ヨーロッパからの移民の間では、お互いに溶け合ってアメリカ人になっていくというメルティングポット（人種の坩堝）の理念は、かなりの部分実現したといえるが、アフリカ系やヒスパニック系、そしてアジア系などの有色人種との間ではこれは現実のものではなく、お互いに溶け合うどころか厳しい人種差別の実態が、公民権運動の中で突きつけられるようになっていく。こうした現実認識の中で、溶け合ってしまうのではなく、自らの民族的、文化的アイデンティティーに誇りを持ちながらアメリカというサラダボウルの一要素となっていくという新しい理念、アメリカンサラダ論が人種マイノリティー運動の中で提唱されるようになっていった。アフリカ系アメリカ人の公民権運動に触発され、アジア系アメリカ人運動も60年代後半から、大きな時代のうねりの一つとして成長していくのである。今回、日系アメリカ人社会を題材にアメリカにおけるエスニックコミュニティの形成をたどるにあたって、サンフランシスコ日系コミュニティのリーダーたちに聞き取り調査を行った。彼らのほとんどが異口同音に口にしたことは、自らがコミュニティ運動に関わっていく大きなきっかけとなったのは、アジア系アメリカ人運動、ことにその一つの成果としての大学などにおけるアジア系アメリカ人学科(Asian American Studies Department)の設立であったと語ってくれた。筆者自身、70年代初頭に留学生であったのだが、サンフランシスコ州立大学で、まだ始まったばかりのこの学科の一コースを履修したことが、日系コミュニティにその後10数年にわたって、ボランティアとして、スタッフとして、また子どもの親として関わっていく直接的なきっかけとなったのである。

西海岸における日系コミュニティは、明治から大正時代にかけて渡米してきた一世によってその基礎が形作られるが、第二次世界大戦の日系人強制収容によって壊滅的な打撃を受ける。戦後の混乱の中で、多くの二世はむしろ郊外に分散していくことによって、メ

インストリームへの同化を進めようとした。サンフランシスコにおいては、60年代の都市中心部の再開発によって日本町がその存続の危機に立たされようとしていたその時に、三世が日系コミュニティを再生させていこうと、次々とコミュニティサービスを行うNPOを立ち上げていく。上述したように三世と同世代である筆者も、サンフランシスコで家庭を持ち新しい生活を始めていく時期と重なり、彼らのコミュニティ運動に参加していくことになる。本論では、こうして筆者自身の体験と2000年の夏にサンフランシスコで行った聞き取り調査を元に、自らのアイデンティティを確立していく場としてのエスニックコミュニティ形成の典型的な例として、70年代の日系コミュニティ再生運動を取り上げ、その歴史から学ぶべきことを考えてみたいと思う。

2. アメリカにおける日系移民とその歴史

アメリカ西海岸^①における日系アメリカ人社会は、日本からの集団移民が始まった19世紀後半から1924年の排斥移民法成立によって日本からの移民が途絶える、わずか40年ほどの間に移民してきた第一世代（一世）、アメリカ生まれの子（二世）、そして孫（三世）という、いわば一系の家族によってそのコミュニティの基礎、内実が築かれたという点において、アメリカにおける人種マイノリティーグループの中でも際立ってユニークな歴史を持っているということができる。日系コミュニティの中では、たとえば第二次大戦後渡米してきたものは、移民第一世代であっても一世とはよばれないのである。一世、二世、三世という単に世代を表わす言葉が、日常使われる英語の語彙の一部として存在し、更には年齢によってそれぞれの世代を特定できる^②エスニックコミュニティは、アメリカにおいては日系社会以外にない。たとえば、中国系コミュニティにおいては、1882年の中国人排斥法にいたるまでに渡ってきた第一世代は、ほとんどが単身の男性労働移民であり、この地で家族をもちその子孫が定住していくという条件に欠けていた。排斥法が解除されたあとは、継続的な移民によってそのコミュニティが形成されてきた。ことに1965年の新移民法により移民が急増し、この中国系社会において何年ごろ渡米したかということによって世代わけをすることは無意味となった。他のアジア系コミュニティにおいても、たとえばフィリピン系社会のように移民の増加した特定の時期を指して第一波、第二波という言い方をする場合はあるが、やはり基本的には継続的に流入する移民によってつくられたコミュニティであるため、日系社会のような構造はもっていない。つまり、はじめに移民してきたものはいつ渡米したにしても第一世代（一世）なのである。それでは、なぜ日系社会のみが、19世紀後半から20世紀初頭の一定の期間に渡米した初期移民のみを一世と呼び、彼らの子や孫によってそのコミュニティが形成されるという構造をもつにいたったのであろうか。そのことをあとづけるために、アメリカへの日系移民の歴史を簡略に記していきたいと思う。

日本よりの最初の集団移民は1868年、元年者とよばれるハワイへの農業移民に端を発する。又、1869年アメリカ本土に会津よりの移住者がやってきて若松コロニーを建設したことが、本土移住の祖とされる。この後1880年代にいたるまで、学生、商人などの渡航がみられるが、この多くの者は定住するに至らなかった。1882年の中国人排斥法の影響で、廉価な労働力を必要としたアメリカ側の要求を満たすかたちで、日清、日露戦争後の帰国兵をかかえ不況と就職難の日本から「一旗あげよう」と渡米する労働移民が急増する。しかし、この移民数の増加ことに農業方面への進出、また低賃金労働者としての役割などが、アメリカ社会において日系人排斥の契機となっていくのである。

こうした両国間の摩擦を避けるという政治的意図から、1908年には紳士協定によって日本政府は日本からの労働移民送り出しを自主的に停止している^③。しかし、この時期に、アメリカでの定住の条件、つまり家族をもち子孫を残す道を日系人は見つけたのである。そして、このことが初期移民である一世にとって、この地に生きていく道をえらばせる歴史的な転換点になったともいえる。それは、日本のお見合いに範をとった「写真結婚^④」といわれる制度であった。紳士協定によって労働移民が停止された後も、家族の移民は認められていたので、この制度を通じ年間一万人以上の日本人女性が、写真でしか見たことのない日本人男性の花嫁として続々とアメリカに渡ってきた。1908年に労働移民が停止される以前に一旗上げようと渡米した男たち、そして写真結婚によって一人太平洋を渡ってきた女たち、この両者が子どもをつくり家庭を持つことによって日系コミュニティのパイオニア「一世」がうまれることとなった。1924年には、ついに家族も含めて日本からの移民が全面的に禁止される。その後、第二次大戦を経て、1952年に発効したサンフランシスコ講和条約により移民が再開されるまでの30年近くにわたって、日本からの移民は全面的に途絶えることになるのである。こうして、長期にわたって日本からの新しい移民の流入がないという歴史的条件を背景に、1924年のアジア人移民を禁止した差別的移民法成立以前に渡米した一世の男たちと女たちによって日系社会の基礎は築かれ、そのアメリカ生まれの子どもたち二世、そして孫たち三世という、初期移民とその子孫による一系社会がつくられていくのである。しかし1941年の日米開戦は、この地に定住していった日系人に決定的な打撃をあたえることになる。1942年2月19日、日本海軍のパールハーバー攻撃の2ヶ月後に、ルーズベルト大統領は、アメリカ西海岸に居住する11万人に及ぶ日系人を、戦時転住所に強制収容させる大統領特別命令に署名した。このうち三分の二はアメリカ生まれのアメリカ国籍を持つ二世であり、彼らはしかし一世とともに「敵性外国人^⑤」として、全ての社会的、経済的権利をわずか数日間の間に剥奪されたのである。

多くのアメリカ生れの二世は、後に組織された442部隊とよばれる日系人大隊に志願し、ヨーロッパ戦線で戦うことによってアメリカへの忠誠を証明しようとした。また、こうしたアメリカ市民を強制収容することの違憲性を主張して、意図的に外出禁止令を破り投獄

され、法廷斗争を闘った二世がいたことは特筆するべきであろう。このアメリカ史の暗黒部分といわれる日系人強制収容の体験は、しかし日系社会にとっては、賠償補償請求運動のなかで世代をつなぐ団結の要となっていく。1980年には6つの都市を結ぶネットワークができ、全米賠償補償請求委員会（National Coalition for Redress Reparation, NCRR）が設立される。こうしたグラスルーツレベルの運動の盛り上がりの中で、日系議員を中心とした議会における活動も活発となり、1981年には戦時市民転住内容諮問委員会による全米公聴会が行われることになった。この中で強制収容の内実が次々と明らかにされ、1988年には市民自由法[®]が成立し、議会からの謝罪及び生存者に対する賠償というかたちでこの全国的な運動が実を結んでいくことになる。こうした、他のマイノリティーコミュニティには見られない歴史的諸条件によって、日系アメリカ人社会という一世と彼らの子孫による一系の特殊なエスニックコミュニティがかたちづくられていったのである。

3. 一世、二世、三世

一世は「バンブーピーポー」とよばれる。その歴史を通じ、最下層の肉体労働、農業、森林、鉄道、ハウスワークといった労働によってアメリカの地に生き、子どもを育ててきた。様々な人種差別法、戦時強制転住といった歴史の中でひたすら耐え、しかしその重みによって折れることなく、まさに「竹」のように生きてきた人々であった。一世の男性の多くは、裕福ではない農家のことに二・三男であった。家のあとをつげない彼らは、日清、日露戦争後の海外渡航熱、あるいは失業者の急増といった社会的背景の中で、アメリカで新しい生きる道を探そうと渡航した人々であった。それぞれ様々な事情はあったにせよ、せまい日本をとび出し海外で生きようという開拓者魂をもった人々であった。一旗組という呼び名でも明らかなように、成功し一旗あげいずれは故郷に錦を飾ろうという意識を持った人々でもあった。しかし、厳しい現実、さまざまな移民差別法に直面し、かなり多くの人々が帰国している。そうした差別の中で、写真結婚によって、やはり海外で生きることを決意した女性と結婚し、家庭をもち子どもをつくった人々は、少しずつではあるがこの異国の地に根を張っていく。移民が日本からやってきて、様々な差別法、排日の嵐の中で自己防衛するとなれば、自らのコミュニティをかたちづくるしかない。ことにサンフランシスコ、ロスアンジェルスなどの大都会においては、急速に日本町がつくられ、和食レストラン、日本語新聞、教会、寺社、クラブ、お店、住宅、と生活に必要なあらゆる部分が日本語でまかなわれるに足るコミュニティが成長した。農業においても、排日の中で自らを防衛するには、日本人農家同志が互助組織をつくるしかなかった。こうして一世の時代には、彼らがアメリカ社会に同化をしようと思ってもできない状況があったのである。一世の多くが、自由に英語を話せない主要な理由はそこにある。したがって第二次世界大戦以前の日系社会は自己防衛のためのエスニックコミュニティであったと言っ

てもよいであろう。彼らは、多くの期待をアメリカ生まれの二世にかけた。成功の条件のキーポイントが教育にあると信じた一世は、社会条件さえ変われば高等教育を受けることが成功の重要な要素になる、メインストリームの白人と伍していけると考えたのである。親の期待をうけて、二世は初等・中等教育において優秀な成績を残し、その多くが高等教育に進んだ。二世が最も多く生まれたのは1915年から25年にかけてである。様々な差別法、そして戦時強制収容という日系人排斥の嵐の中で彼らは成長した。親に期待をかけられ優秀な成績を残しながら、彼らこそ最も露骨な人種差別を経験した世代であった。なんとかメインストリームのアメリカ人に同化し階層上昇をしていかねば、という願いはこの二世の中にもっとも激しいかたちでうえこまれた。二世の人の中で「日本語を話せることが友人に知られるのがこわかった」という話をきくことも多い。他と変わらず、何とか自分をめだたさぬよう白人社会に同化していこうとしたこの世代は、「バナナ[®]」といういい方をされることもある。その結果、日本語しか話せない一世の両親と日本語で話し、又学校では英語による教育を受け両国語を使いこなせる二世が、その子どもである三世に日本語を伝えなかったというのは当然のなりゆきであったのかもしれない。二世の多くが10代後半から20代にさしかかる頃、第二次大戦が勃発する。大多数の日系人が住んでいたカリフォルニア州の法律で、日本人は白人と結婚できなかったという法的な理由だけでなく、戦時転住所に日系人だけが押し込められるといった状況の中では、必然的に二世同士が結婚する割合が圧倒的多数を占めた。こうして二世を両親に持ち、人種的には日本人である三世の多くが第二次大戦後うまれた。彼らは、いわゆる中産階級の仲間入りをしはじめた二世の親のもとで、英語だけを聞き表面的には戦前のような露骨な人種差別がなくなってくる中で成長した。ある三世は、大学にはいり、アジア系アメリカ人の運動にふれるまで、自分が「日本人」であることなど考えてもみなかったと語った。こうして外見的な特徴をのぞけば、言語的にも文化的にも多数派アメリカ人とかわらない、いわゆる同化の成果としての三世が誕生したのである。

4. 戦後の日系社会と三世のアイデンティティーの危機

戦時転住所からもどった日系人は再び一からやり直さなくてはならなかった。西海岸最大の日系コミュニティであったサンフランシスコの日本町とロスアンジェルスのリトル東京には、日系人以外の人々がはいりこんでおり、戦前のような規模での再建はならなかったが、彼らは再び規模を縮小しながらも、自らのコミュニティ建設をはじめたのである。しかし、50年代後半からはじまった都市再開発により、70年代前半までには賃貸家屋に住んでいた人々を中心に3000に及び日系人家族が、コミュニティを離れざるを得なくなった。こうした賃貸住宅や小商店がとり壊された後には、巨大資本ことに日本からの企業が進出し、次々と大きなショッピングセンター、ボーリング場、ビジネスセンターなど

が建設された。日系コミュニティが大きく変質しようとしているこの時期に三世は成長し、60年代後半からは大学のキャンパスの中で、公民権運動からはじまる大きな人種マイノリティーの人権運動に合流していくのである。この白人をメインストリームとする社会の中で、たとえ強制収容されながらもアメリカ軍に志願しアメリカに忠誠を誓い、同化の努力をしつづけた二世の両親に育てられた三世は、今アフリカ系アメリカ人をはじめとするマイノリティーの人々が、みずからの民族的誇りを獲得しようとする運動にふれ、大きなアイデンティティーの危機に直面することになる。シンガーソングライターであるジョアン宮本は、その気持ちを次のような詩に託して表現した。

幼い頃、私はよく聞かれた
あんた^{なにじん}何人？
ママが教えてくれたとおりに答える
アメリカ人よ
チンチン・チャイナマンだ
おまえはジャップだ！
くやしさをかみしめながら家に帰る
ママは言う
かまわないのよ
ひとりで歩いていく人が
一番速く歩いていけるのよ

私は聞かれつづける
あんた何もの？
私はアメリカ人よ
言葉が返る
いや、ほらナショナリティの事さ
私はアメリカ人よ
そこが私の生まれたところ
こみあげる熱いもの
そして皆が知りたがっている答が出た時・・・・・・ジャパニーズ
ああ、私はそれまでずっと「日本」に生きてきた！

いっそ、出すべき答を
すぐ出してしまおう

彼らが私を分類し、ファイルし
整理棚にすぐ収めこめるように
彼らは私たちを好奇の目で見やり
日本人と中国人のちがいを得意げにおしゃべりし
そして私たちを
映画やテレビやポスターや雑誌に出てくる通りの日本人にならせよう
なりたがらせようとした

そう
だから私はひたすら努力してきた
カリフォルニアで私たちが土地を持つことを禁じられた時
私たちはアメリカ人になろうとしていた
白人との結婚が禁じられた時
私たちはアメリカ人になろうとしていた
強制収容所に送られた時
私たちはアメリカ人になろうとしていた

アメリカ人になろうとして
私たちは
自分のもとの国との戦争にも
進んで志願した
彼らがヒロシマとナガサキに
原爆をおとした時も
私たちは
まだそうなろうと努力していた

そしてついに苦勞が実る
私たちの親たちは
自分たちが手のとどかなかったもの
何でも子どもたちに与えようと
けんめいになって
いい教育を受けさせた

私たちは何とかいい暮らしをつかんだ

すると、今度は彼らは
私たちを手本に使う
黒人にメキシコ系人に
見よ、日本人はやった
日本人はみごとに困難をのりこえた

でも私は
いつもだれかに聞かれていた
おまえは何者なのか？
今、私は答える
私はアジア人。
すると彼らは言う
なぜ自分たちを隔離したがるのか
今、私は言う
私はジャパニーズ。
すると彼らは言う
ここが世界で一番偉大な国だっていうことを知らないのか
今、私は
このアメリカの内部にあって言う
私は第三世界の人間です
すると彼らは言う
ここが嫌いなら帰ったらどうか^⑧
(岡部一明 訳)

二世同士の両親から生まれた三世は、当然 外見は日本人であるが日本語を話すことができず、結果として文化の語り部である一世の祖父母との会話もままならなかった。二世の両親は戦時強制収容の体験を語らず、学校の歴史の時間で教えられることもなかった。大学のマイノリティー運動にふれる中で、はじめてその事実を知ったという三世も多い。サンフランシスコ州立大学では、1968年アジア系アメリカ人の歴史や文化を学ぶための正式な学科を設立するよう学生からの要求が提出され、1969年には、カリフォルニア大学バークレー校の第三世界学生ストライキの中で、この要求が更に鮮明につきつけられていく。これは、たとえば日本や中国の歴史や文化を学ぶコースはあるが、日系アメリカ人や中国系アメリカ人の歴史や文化を学ぶコースがどこにも見当たらないという、アメリカにおける人種マイノリティーグループから見ると、当然なそして根本的な疑問に端を発し

ている。これらの要求を具体化し、大学当局と折衝するコミュニティ組織としてアジア系アメリカ人研究（Asian American Studies）委員会がつくられた。この運動の成果は、現在多くの大学でアジア系アメリカ人研究学のコースが設置され、学位認定をできるような学問分野に成長するという形で結実してきている。こうして、アジア系アメリカ人として、自らのアメリカにおける歴史や文化を学ぼうと考えはじめた三世の多くは、すでに再開発によって多くの住民の立ちのきが始まりつつあったサンフランシスコ日本町に戻り、新しいコミュニティづくりに参加していった。それまでも、主に一世による「県人会」「日本人会」などの、日本人であることによってつながる組織や、二世の全米組織である「日系アメリカ人市民協会」（Japanese American Citizens League）などがあったが、ここにおいて、はじめてアジア系アメリカ人として、自らの民族的ルーツに誇りをもとうとするグラスルーツグループが、主に三世の手によって誕生していくのである。

5. 70年代のコミュニティ再生運動

自らのコミュニティの再生を意図的にめざした三世の一部は、1970年に「日系青年会 JCYC」（Japanese Community Youth Council）をサンフランシスコ日本町につくり、まず日系の青少年の組織化に乗り出した。2000年6月に30周年を迎えたJCYCは、まさに前述のアジア系アメリカ人としての意識の覚醒の中で、自らのアイデンティティ確認のために、エスニックコミュニティにその拠り所を求めた好例といってもいいであろう。このJCYCは、後に夏休みの間のサマーキャンプや放課後の子どもたちのセンターを作るなど活動を広げ、子どもたちの思い出といえばJCYCと結びついていることが多いという、新しい日系アメリカ人世代の育成に大きな役割を果たすことになる。当時10代後半から20代であった三世の多くは、このJCYCを拠点としてさまざまな分野のコミュニティ活動に関わっていくようになる。

1971年には、祖父母である一世との親睦を深めようという目的で「気持会」（Kimochi Inc.）が、やはり日本町に創立される。この創立当時から関わり、現在サンフランシスコの中でもっとも大きな高齢者サービスに成長した気持会ディレクターのスティーブ中條は、当時を振り返って次のように語ってくれた。「私達が一番初めにやろうとしたことは何だったと思いますか？実は餅つきだったんです。餅つきはもち米を蒸籠で炊くことから、臼や杵の調達、実際の餅つきの仕方まで一世に一つ一つ聞かなくてはならなかったもので、三世としては自分のじいさんばあさんと久しぶりに話をしたという者もいたし、一世にとっても自分の文化を孫たちに伝えることができるいい機会だったというので、そりゃ腰もしゃんとして楽しそうでした。」こうして一世との親睦の場として始まった気持会は、その交流を通して、英語を話すことができない一世たちが、当然受ける権利がある社会的サービスを受けていないという事実と直面させられる。これは、ことに家族を持たない一

人暮らしの一世に顕著であった。スティーブはこう続けた。「私達のように英語を母国語としているものには、絶対わからないことなだと思ひ知らされました。だから夜も安心して歩けるようにエスコートサービスをはじめたり、年金の書類書き込みを手伝ったりという私達にできることから始めることにしました。これは文化の問題でもあると思うんですが、一世の言葉でいうと“世間様”に遠慮をして、高齢者補助金とか介護サービス援助金とか当然受けることのできる社会的サービスを受けていない一世がたくさんいたんです。」こうして、気持会が単なる親睦団体ではなく、ソーシャルサービスを行うコミュニティグループへとその活動の幅を広げていくのに一年もかからなかった。1972年には連邦の保健教育福祉局からの助成金があり、有給のスタッフを雇い、その翌年にはランチを提供する栄養プログラムが始まる。この気持会のランチプログラムは、日本食を中心にしたメニューで、現在まで日系人以外のシニアにもとても人気のあるプログラムである。1976年には、ランチプログラムに歩いて来れない人々を送迎するためのバスサービスが開始され、気持会は日本町だけにとどまらない、サンフランシスコ市民のためのシニアセンターとして成長していく。この気持会創立と同じ1971年には、JCYCの若者とシニアの中間の年代の人々に対するソーシャルサービス団体として「日系社会奉仕会JCS」(Japanese Community Services)がつくられる。当初は二世の人々の利用を予想していたところ、このJCSに相談に来る圧倒的多数は新渡米者が占めるようになる。二世の多くはこの時期には40-50代の働き盛りであり、日本町から地理的に離れたところで生活している人が多かったということもその原因の一つであろう。新渡米者層は、日本の高度経済成長に伴い70年代前半から増加し、JCSにも言葉、文化の違いからくるさまざまな問題を抱えた人が相談に訪れるようになる。又、こうしたJCSのサービスが知られるようになると、他のソーシャルサービス機関、病院、学校などから日本人のケースが照会されてくるようになった。英語が不得手なために問題を抱えている人には、当然日本語でのサポートや、日本語で対応できるスタッフが必要になってくる。JCSの中心メンバーである三世は日本語が話せない。そこで必然的に生まれてきたアイデアが、日本人新渡米者自身のセルフサポートグループであった。JCSはこのグループ作りの支援に多くの力を入れ、やがては新渡米者の会がJCS内に設立されるのである。こうしてそれぞれの世代へのサービスを対象としたコミュニティ団体、JCYC、JCS、そして気持会という三つのグループを核にして、日系コミュニティの再生運動がはじまったのである。この1971年からは新しいアジア系アメリカ人文化の創造を目指して、毎年8月に日本町ストリートフェアが行われるようになる。これはエキゾチックな「日本文化」に興味を持つアメリカ人観光客を対象にしたそれまでの商業主義的なお祭りとは異なり、三世が他のアジア系アメリカ人とともに自らのアイデンティティーを求めて、作り上げようとしたコミュニティ運動であったということもできる。

こうしたコミュニティ再生運動と逆行するかのように、60年代後半からサンフランシスコ市による日本町再開発が着々と進行していた。これは都市中心部の古い建物などを整理し、空いた土地に資本投下を行い町を「活性化」させるという計画であり、チャイナタウン、ジャパントウンなどが大きな影響を受けた。前述したように戦時強制収容によって分散させられたとはいえ、多くの日系人が日本町に戻ってきていた。しかしそのほとんどは借家人であり、地主やアパートの所有者が再開発局に土地、建物の売却を決めた場合は、立ち退かざるを得なかった。こうして70年代前半までに3000人以上に及ぶ日系人が日本町を離れることを余儀なくされたのである。皮肉なことに再開発局と協力して、こうした土地を買い占め資本投下を行ったのは、日本から進出してきていた企業であった。古い建物を取り壊し、3ブロックにも及ぶ観光客を対象としたジャパンセンターが建設され、ボーリング場なども作られた。自分たちが戻ってきて、日系アメリカ人コミュニティとして再生させようとしている日本町が、こうしてそこに住む住民のための町からツーリストセンターに変わっていく様子を目の当たりにした三世たちは、1973年、コミュニティ破壊と日本企業の土地買い占めなどに反対し「日本町立ち退き反対委員会CANE」(Committee Against Nihonmachi Eviction)を設立する。自らの体を、チェーンで取り壊される予定の古い建物にまきつけ抵抗する彼らの姿は、「おとなしいマイノリティー」という日系アメリカ人につけられたレッテルをひきはがすものとして、連日マスメディアで報道された。このCANEに最初から関わってきたグナ小竹は「私たち日系アメリカ人は、2度にわたって自分のコミュニティから強制退去させられたといってもいいのではないかと思います。初めはアメリカ政府による戦時強制収容、そして2度目は日本からやってきた大企業による立ち退きでした。ことに私達、日系人が100年近くに渡って築き上げてきたコミュニティに、まるでその歴史を無視するかのように、そしてそれを利用する形で、よりにもよって日本の企業が再開発局と手を組んで入り込んできたことはショックでした。その結果、このコミュニティは、私たちの考えたような形で再生はされませんでした。しかし私たちの立ち退き反対運動がなかったら、市再開発局は私たちの要求するコミュニティサービスグループのための最低のスペースさえ提供しなかっただろうし、ここは本当に単なるツーリストのためのショッピングセンター、いわゆる“日本文化”の展示場になっていたのではないかと思います。」と語ってくれた。そしてまさに彼女の言うように、日本町は多くの日系人がそこに住む町として再生されることはなかったが、日系アメリカ人の文化を生み出し、様々なサービスを人々に提供するグラスルーツグループのコミュニティとして再生されていったのである。こうして新しいエスニックコミュニティとして日本町に新鮮な活動が巻き起こっているというエネルギーは次々と波及していった。

1974年には、日英バイリンガル多文化保育園「日本町リトルフレンズNLF」(Nihon-

machi Little Friends) が設立される。未来を担う子どもたちが、この新しいコミュニティの中で、互いの文化的背景に誇りを持って成長してほしいという願いを込めて、保育園は多文化主義を、その理念の根幹において創設された。そして、わずか3人の三世の親たちが始めたこの保育園は、今では2つのセンターと小学生のためのアフタースクールを抱える大きなコミュニティ団体へと成長したのである。設立当時からボランティアとして関わり、現在もディレクターを務めるキャシーイナマスは「始めた当初は、先生3人と日系四世の子ども3人でした。しかし本当に質の良いチャイルドケアセンターを探していた親たちが子どもを連れて次々と参加してきました。私は今、参加といいましたが親は単に子どもを預けるのではなく、センターの多くの活動に参加してくれました。今もそうですが、リトルフレンズは親と私達スタッフの共同作業で運営されているのです。オープンから一年も経たないうちに、日系アメリカ人だけではなく英語のまだよくできない日本人新渡米者の子どもたちや、中国系、フィリピン系などアジア系アメリカ人の子どももどんどん増えていきました。日系の保育園だからといって日本文化に関することだけを学ぶのではなく、そうした親たちに中国のお祭りについて話してもらったり、フィリピンの歌を習ったりという多文化アクティビティーもこのころに始まりました。」単に日本語と英語の二か国語を教えるだけでなく、多文化教育にその基礎を置いたリトルフレンズの伝統は今も脈々と流れつづけている。筆者自身、フィリピン系アメリカ人の妻との間に生まれた二人の子どもは、このリトルフレンズの卒業生であり、彼らの人間としての大切な一部分はここで学んだ事によって形成されたと思っている。この1974年には、前述したJCSの中で生まれた新渡米者の会が「のびる会」というNPO団体として独立する。のびる会とは、言葉や文化の壁によって日々緊張して暮らしている新渡米者が、この新しい土地で背中を伸ばして生きていこうという願いを込めて命名された。のびる会が、単なるセルフサポートのグループから外部へのサービスを提供するコミュニティグループへと変質していくことによって、更に多くの日本からの新渡米者がコミュニティにやってくるようになる。このグループの中の一部の人が集まり、後に日米間のマイノリティー運動の情報、教育交流の中心的存在となっていく「日本太平洋資料ネットワークJPRN」(Japan Pacific Resource Network) が誕生する。このJPRNは、1990年には日米マイノリティー会議を、サンフランシスコ、ロスアンジェルス、ニューヨークの3都市で開催し日米間のグラスルーツレベルでの情報のかけ橋となっていく。1975年には三世の法律大学院の学生たちが中心になって「日本町リーガルアウトリーチNLO」(Nihonmachi Legal Outreach) という法律相談所も作られた。創立当時から関わり、現在もディレクターとしてNLOを支えてきたディーンイトウ テイラーはその始まりを次のように語ってくれた。「70年代の初めにアファーマティブアクションの“恩恵”もあって、ロースクール(法律大学院)に入ったマイノリティーの学生がたくさんいたのですが、その中の三世が中心になって日本

町にも法律相談サービスを始めようということになったんです。何とか自分たちが獲得したこの法律の専門家という立場を生かしてコミュニティの役に立ちたい、とNLOに参加した人はみな考えていたと思います。助成金もほとんどおりない状態で、他のコミュニティグループのオフィススペースを借りて細々と法律相談を始めました。最初のころは気持会の一世、新渡米者などの相談が中心でした。」それまで、法律相談など考えたこともなかったという一世も、気持会を通じて行われる相談会には気楽に参加するようになった。又、言葉の問題を解決するためにも、のびる会など他のコミュニティグループとのネットワークで共同の取り組みが行われるようになり、コミュニティが一つの有機的な活動を行うまとまりを見せ始める。戦前には、その歴史的条件から自己防衛のためにできた日系コミュニティが、70年代には、アジア系アメリカ人であるというアイデンティティーの拠り所として再生され、更には外へ向かってのサービスを提供する力を持ったまとまりのあるエスニックコミュニティへと成長していったのである。

6. 今、日系コミュニティは

2000年8月に、本論の基礎資料を作成するために、サンフランシスコ日系コミュニティでの聞き取り調査を行ったが、その再生運動から20数年たった現在、やはりコミュニティの中心になって活動していたのは、今や40代後半から50代と年齢を重ねた三世であり、四世は三世のような一つのまとまったグループとして、日系社会の中で「見える存在」とはなっていないようであった。三世の多くは日系人以外と結婚しており、四世になると日系アメリカ人であるという意識が希薄になってくるということもあるだろうし、三世の時代のように自らのアイデンティティーを求めて、コミュニティ活動へと駆り立てるような大きな社会的背景があるわけでもない。更にはアメリカ西海岸に限っていえば、アメリカンサラダはそのサラダボウルの中で、少しずつ溶け始めるという「新しいメルティング現象」がおき始めているということもいえると思う。1971年に始まった日本町ストリートフェアは、今でも毎年8月に行われているが、日系三世を中心に始まったこの祭りは、アジア系という枠さえ越え、すでにサンフランシスコ、ベイエリア全体の若者たちに最も人気のあるイベントの一つであり、あらゆる人種、民族グループの見本市のような観がある。その祭りを支えるボランティアの若者達も、日系アメリカ人とは限らず、さまざまな民族的背景を持った人が集まってくるという。高齢者サービスの気持会を例にとっても、一世がほとんどいなくなった今、そのサービスの対象は日系人に限らず、あらゆる民族的背景を持ったアメリカ人になってきている。ことに日本食を主としたそのランチプログラムは、大変人気があり毎日サンフランシスコ中から200人以上のシニアが集まってくる。自らの養護ホームを運営し、ソーシャルサービスも充実している気持会は、すでにサンフランシスコ全体の高齢者サービスのモデル的存在となっているといってもいいだろう。

う。事実、70年代に気持会創立に関わった三世の何人かは、現在サンフランシスコ市全体の高齢者政策を企画し、実行する高齢者問題委員会（Commission on Aging）の公的なポジションについている。気持会だけではなく、他の団体の三世もコミュニティを離れ、公的な政策決定に関わる仕事をしている人は多い。日系人戦時強制収容が憲法違反であると、アメリカ政府を相手取って訴訟を起こしていた3人の二世、フレッドコレマツ、ゴードンヒラバヤシ、ミノルヤスイの弁護団の一人であり、70年代から80年代にかけて多くのコミュニティ活動に関わり新渡米者の会「のびる会」の理事でもあったデニスハヤシは、1996年にクリントン大統領に任命されて連邦政府の人権委員会委員長に任命された。更に大きな舞台での政策決定に関わるという意味では、彼などはその好例であろう。コミュニティに残ってずっとグラスルーツグループの活動を支えつづけてきた人、市や州などの政策決定を行う場でこれまでの経験を生かして活躍している人とそれぞれではあるが、前述した日系社会が、自己防衛のためのコミュニティから外へのサービスを提供するコミュニティへと成長してきたという機能の面だけではなく、人材という面からも自らのエスニック集団を大きく超えた地平に広がり、貢献をしているということが言えるのではないと思う。こうして活躍の場は違っても、気持会の基金募集のために毎年行われる「三世ライブ」というイベントには、三世を中心として1000人以上の人が集まるといえる。70年代のコミュニティ再生をともに担った人々にとって、これはホームカミングデイともいえる催しなのだろう。三世という日本語で単に第三世代を表す言葉が、アメリカにおける日系コミュニティでは、その歴史の上でそれ以上の深い意味を持つ言葉である事を、前述した「日本町ストリートフェア」や「三世ライブ」で三世たちの熱気を呼吸すると実感することができる。まさに時代が人を作るのであろう。たとえこの日系コミュニティが、今後三世から四世に引き継がれていなくても、それはそれでよいのではないだろうか。「アメリカは、国家が持つ民族の共同体としての概念を、根本的に変えてしまう壮大な実験をしているように見える」と、序文に書いたが、サンフランシスコの日系コミュニティも、決してその大きな実験の中の例外ではないのだから。

注釈

- ①西海岸と限定したのは、アメリカでカリフォルニア以上に日系人の多いハワイ州では本土よりも早い時期から移民が始まり、時期的に多少のずれがあるためである。
- ②大まかな分類だが、一世の男性は、現在生きていれば110-130歳代、一世の女性は90-110歳代、二世は70-80歳代、三世は40-50歳代である。
- ③1907年11月から、1908年2月にかけて、林外相と、オブライエン駐日米大使との間で交換された7通の書簡、覚え書きで成立した。協約の主旨は、在米、あるいは以前、定住していた者の家族以外には、旅券を発給しないことを定めたものであった。
- ④アメリカ人の目に、非人道的で奇異に映った、この「写真結婚」も、1919年には、自粛策が取られた。

- ⑤同じ「敵国」でも、ドイツ系人、イタリア系人は、強制収容を受けなかった。明らかに、人種的偏見があったことが指摘される、ゆえんである。
- ⑥1998年、8月に成立した「市民的自由法」は、公法100-383の第二編にあたる。この法律によって、生存者一人につき2万ドルの賠償金が支払われることが決定した。
- ⑦バナナとは、外見つまり膚の色は黄色であるが、中身は白人文化持つという意味で使われた。
- ⑧*Roots: An Asian American Reader*, UCLA Asian American Studiesより引用

参考資料

Inequality in Education, Josue M. Gonzalez, Harvard University Press

Roots: An Asian American Reader, Amy Tachiki, UCLA Asian American Studies Center

The Experience of Japanese Americans in the United States, A Teacher Resource Manual, San Francisco Unified School District

The Bamboo People: The Law and the Japanese Americans, Frank Chuman, Publishers Inc.

Melting Pot: Myth or Reality? Cultural Pluralism, A.T. Kopan, McCutchan Publishing Corporation

Prejudice: Japanese Americans-Symbol of Racial Intolerance, Carey McWilliams, Little Brown & Co.

Shattering the Melting Pot Myth: Teaching Ethnic Studies, Barbara Sizemore, National Council for the Social Studies

Newspaper Articles

San Francisco Examiner

San Francisco Chronicle

Hokubei Mainichi

日系アメリカ人、強制収容から戦後補償へ、岡部一明、岩波ブックレット No. 234

アメリカを知る辞典、平凡社

日系アメリカ人、鶴木真、講談社

インタビュー 2000年8月20-25日 サンフランシスコ市

スティーブ ナカジョウ

気持会

キャシー イナマス

日本町リトルフレンズ

ディーン イトウ テイラー

日本町リーガルアウトリーチ

リチャード トケシ

JAMワークショップ

ダイアン ヤマシロ オミ

サンフランシスコエンダウメント財団

ケイノムラ

サンフランシスコ教育委員会

ジョン オオタ

日系人戦時賠償補償請求委員会